

Essay

Sapiarc.com

2018年2月1日(2018-1)

イヌの不思議な話

今年はいヌ年だから、実際にあった、イヌの不思議な行動について書いておこう。これは、渡辺久雄著「甲東村から」（1993年12月神戸新聞総合出版センターから出版）の最終章「愛犬メール物語」に書いてあることである。これは、渡辺氏が飼っていた犬に関することなので、実話である。

私のエッセイを読んでいる方々が、上記の本を読む可能性はないと思うので、これから書くことの多くは、この本からの引用と要約であることを、ここに記して、著者の渡辺久雄氏に感謝しておきたい。同氏は1910年台湾の台北市で生まれ、1934年京都帝国大学文学部史学科(地理学専攻)を卒業し、関西学院大学予科教授、長崎高等商業学校教授、関西学院大学文学部教授などを勤めた。

結論を先に書くと、太平洋戦争中に渡辺氏が住んでいた長崎市で、同氏が飼っていた犬が、同氏宅から約6キロメートル離れたところから、その間の道路状況などをまったく知らないはずなのに、自力で渡辺氏宅に戻ってきたという話だ。

上記の本の題にある「甲東村(こうとうむら)」とは、現在、兵庫県四宮市の一部になっている村のことで、阪急電鉄今津線の門戸厄神駅から仁川駅までの両側に沿った地域のことだ。この名称は、神戸市の北側にそびえる六甲山の東にある独立峰甲山(かぶとやま、標高309メートル)の東側にあることに由来している。私は、かつての甲東村で生まれ(現在の地名で

は西宮市仁川町4丁目)、そこに、14歳のとき東京に移るまで住んでいた。この場所は、西宮市とその北にある宝塚市の境界に近い。

イヌの不思議な行動は、前記のように、渡辺氏が長崎高等商業学校の教授だったときに長崎市で経験されたことなので、実は甲東村とは直接の関係はない。長崎高等商業学校(長崎高商、現在の長崎大学経済学部)は、長崎市の中心部にあるJR長崎駅から直線距離で4キロメートルほど東南にあった(ある)。長崎原爆の爆心地は長崎駅からの北に約1.5キロの地点で、その東500メートルほどのところに浦上天主堂があり、そこから南に少し下がったところに、あとで話に出てくる長崎医科大学(長崎医大、現在の長崎大学医学部)があった(ある)。

長崎市の地形は複雑で、岡と谷が多く、そのおかげで原爆による被害は、平坦な広島市の場合と比べて少なかったと言われている。JR長崎駅の真東約1.5キロメートルのところに標高366メートルの金比羅山がある。長崎高商は、金比羅山の南麓の平地にあり、渡辺氏の自宅は、その近くにあった。つまり、渡辺氏の自宅からJR長崎駅に行くには、金比羅山の南側の平地を走る市電に乗って、はじめは西向きに進み、途中から北向きに進むことになる。長崎医大に行く場合も、同じ道筋を通ることになる。要するに、金比羅山の南側から西側を回ることになる。

太平洋戦争の真ただ中の昭和 18 年(1943 年)はじめの寒い朝、渡辺氏の自宅の低いコンクリート塀の上に、小さな犬が捨てられていた。純白の毛並みのポメラニアンで(渡辺氏はそう書いているが、純血種かどうかはわからない)、渡辺氏は夫人と相談して、屋内で飼うことにした。チロルと名付けた。食糧難の時代に、よくそういうことをしたものだと思う。最初は栄養失調のせいか子犬に見えたが、既に成犬で、その年の春に 3 匹の仔犬を産んだ。そのうち、1 匹だけが成長したので、メーメル(略してメメ)と名付けた。「メーメル」は、リトアニアの南部を流れてバルト海に注ぐ川のドイツ語名で、この川はベラルーシに端を発している。リトアニアではネムナス川、ベラルーシではネマン川と呼ばれている。メーメルが雄犬か雌犬かは書かれていないが、生きていた 13 年間に仔犬を産んだという記載がないので、おそらく雄犬だったのだろう。

昭和 19 年(1944 年)には、食糧事情が悪化して、当時の政府は、家庭で飼っている犬や猫を供出するようという通知を隣組(となりぐみ: 5 軒から 10 軒程度の世帯から成る末端行政組織)を通じて、各家庭に出した。供出された動物は殺処分が付された。この措置は動物園でも実行されたので、東京の上野動物園に動物がいなくなったことはよく知られている。今では考えられない、悲惨な時代だった。渡辺氏宅は犬を 2 匹も飼っていたので目立った。しかし、殺処分されるために供出することはかわいそうなので、長崎高商の校医をしていた長崎医大の教員に頼んで、「医学実験用」に医大で飼ってもらうことにした。

それで、チロルとメーメルを渡辺氏宅から長崎医大まで運ぶことになった。2 匹を 1 匹ずつボール箱に入れ、ボール箱を大きな風呂敷で包んだ。渡辺氏自身が、その 2 個の箱を両手にぶら下げて、市電に乗り、長崎医大まで運んだ。どちらも小型の犬だったので、そういうことができたようだ。

かなり日が経ってから、チロルとメーメルを渡した長崎医大の教員から渡辺氏に電話がかかり、「餌を与える隙に、2 匹とも檻から逃げ出してしまった。申し訳ない。」と言われた。その翌日、また電話がかかり、チロルだけが戻ってきたと知らされた。

当時、大学や高専の文科系教員や学生は、工場などに動員されており、渡辺氏自身も自宅から遠い三菱造船所で働いていた。チロルだけが長崎医大に戻ってきてから 3 日後に、渡辺氏が疲れて帰宅すると、夫人が興奮した口調で「午前中にメメが戻ってきました」と告げた。これには渡辺氏は驚いた。夫人は、隣組に届いた配給品を受け取ってから、数人の主婦と道路上で世間話をしていた。そのとき、茶色の犬が夫人らの方にフラフラと歩いてきた。主婦のひとりが「あーっ、メメちゃんよ!」と叫んだので、夫人もそうだとわかった。本来は真っ白な犬なのに、茶色になっていたのは、はじめ夫人にはわからなかったようだ。メメが戻ってきたことが夫人にわかったとき、茶色の犬は急に元気になって、まるでボールが転がるように走ってきて、夫人に飛びついた。

メーメルが、どういう 4 日間を過ごしたのか、どういう経路で戻ってきたのかを知りたいところだが、残念ながら、手がかりはまったくなかった。茶色の犬に見えるほど泥まみれになったことから見て、何かを食べたり、水を飲んだりするのに、非常な苦勞をしたのであろうことは察せられた。上述のように、渡辺氏宅から医科大学に行くには、金比羅山の南側から西側に回るのが普通の道筋だったが、金比羅山の北側にある低い峠にある狭い山道を通って行くこともできた。

メーメルが戻ってきたのは、北の方角からだったことから見ると、金比羅山の北側を通って、南向きの道に沿って来たことが、渡辺氏にはありそうに思えた。しかし、4 日間もかかっているのに、この道筋をすらすらと辿ったのではないことも明らかだった。

メーメルが戻ってきたとき、夫人と一緒にいた隣組の主婦たちが、「こんなに利口な犬なのだから、もう供出などせずに飼っておやりなさい。食糧は皆で何とでもしますから。」と言ってくれたので、渡辺氏夫妻はメーメルを飼いつづけることにした。長崎市の郊外にあった渡辺氏宅あたりでは、自宅の敷地内の「家庭菜園」で、サツマイモや豆類などの野菜を自給自足するのが多分普通に行われていただろう。また、少し離れたところに、もっと本格的な畑を持っていた人もいたかもしれない。だから、街中に住んでいた人たちと比べると、食糧事情はよかったのだろう。

ネットには、イヌが驚くほど遠いところから戻ってきた帰巣(きそう)の事例がいくつも出ており、イヌの帰巣本能に関する研究についての記述もある。しかし、結論的には、イヌの帰巣本能の本質はよくわかっていない。いずれにせよ、すべてのイヌに帰巣本能があるわけではなく、迷い犬になってしまう方が遥かに多いことも事実である。ここに書いた事例でも、チロルには帰巣本能はなかったらしく、捨てられたあと、渡辺氏宅の低いコンクリート塀の上で、寒さに震えていたのだ。また、一旦逃げ出した医大に翌日戻っている。

上記の話は、昭和19年(1944年)のこのようだが、翌昭和20年(1945年)8月9日、原爆が長崎市に投下された。渡辺氏は、この日も三菱造船所の屋内にいて、強い光と衝撃を感じはしたが、自身は無事だった。帰宅するのに長い時間がかかった。自宅は大破していたが、夫人もメーメルも原爆投下前に防空壕に入っていたので、無傷だった。しかし、爆心地の近くにあった医大は壊滅した。チロルを飼ってくれていた教員もチロルも犠牲になった。

渡辺氏は、長崎高商教授になる前に、西宮市にある関西学院大学予科教授を勤めていた(予科は旧制高等学校に相当)。終戦後の昭和22年(1947年)、渡辺氏は関西学院大学文学部教授になり、元住んでいた西宮市に戻った。いろいろなことがあったが、西宮市に移り住んでからの約10年間、メーメルは渡辺家の忠実な番犬

をつとめ、夫人が買い物などに外出するときには、嬉々としてお供をした。

私も犬好きである。最近、犬をペットとして飼っている人が多い。2匹も3匹も飼っている人もいる。これらの人たちが飼い犬を、それが生涯を終えるまで、ずっとかわいがってやることを、私は願っている。(おわり)